

小話「フォアウェイ・テスト」



大阪ロータリークラブ

四つのテスト委員会

(1973.2)

は し が き

ロイ D.ヒックマン R. I. 会長の全
ロータリアンに対する

“LET'S TAKE A NEW LOOK
and act individually!”

「もう一度見直して行動しよう」

という要請に基き、

“THE FOUR-WAY TEST” に関する
認識を新たにする一助にもと思い、会員
塚本義隆君（第366区パストガバナー）を
煩わして、この小話を書いてもらいまし
た。どうかご一読のほどを。

大阪ロータリークラブ

四つのテスト委員会（1973）

委員長 松本正一

塚本義隆 贈答集

〔目 次〕

	ページ
小林雅一君の話	1
モットーでなく、物差し	3
世界恐慌の嵐の中で	5
如何に虚偽が多いか	8
広告文案を反省せよ	11
破産会社が立ち直る	12
ハーバート・テラーという人	14
「尺度」の誤用のないように	16
論語の三省、ロータリーの四省	17
日本語訳の検討を	19

小話「フォアウェイ・テスト」

塚 本 義 隆

小林雅一君の話

小林雅一（まさかず）という人物をご存じですか。彼は東京ロータリークラブの古い会員であり、15年ほど前に国際ロータリーの第一副会長をつとめたことがありましたが、その後惜しくも病を得て亡くなりました。

第二次大戦後間もないころ、彼はアメリカへ商談で出かけたことがありました。その時、フォアウェイ・テストのおかげで大変助かったという話があります。小林雅一は内外編物という、靴下などを造る会社の社長でありましたが、相手は初対面であるし、日本語の解からぬアメリカの実業家と、彼らのホームグラ

ウンドで、英語で交渉するのに一抹の不安を抱いたといひます。何ぶん戦争当時の敵意がまだくすぶって相手側に残っておりはせぬかとの懸念すら考えられたのです。

小林雅一は恐るおそる話を切り出しました。「私どもは皆さまに初にお目にかかる次第で、そのうえ、あなたがたの商習慣もよく存じません。しかし、私はすべてをフォアウェイ・テストの精神に則って相談したいと思ひます」と述べた上で、フォアウェイ・テストを印刷したリーフレットをカバンから取り出して相手方に回わしました。「これは私がロータリークラブで知った商売上の案内役であります。これにしっかりつかまっておれば間違いないと信じております。そしてこの精神の下で皆さまとここにお会いし

ているのですが」といいました。

席上の人人はそのフォアウェイ・テストを一読して（その中にロータリアンもいたことが後で分かったが）会議の空気がすぐになごやかになりました。そして、このフォアウェイ・テストに書いてあることは、商取引の基礎にすべき条件であるという点で彼我の意見が一致しました。交渉はとんとん拍子に進んで、談笑の間に双方とも満足のいく商談が成立したというのであります。

モットーでなく、物差し

このフォアウェイ・テストというのはロータリーのサービス精神を表わした二標語、すなわち、“Service above self” ; “he profits most who serves best” と並んで重要視されているもので

す。標語と違う点は“テスト”はスローガンではなくて、物差しなのです。

今これを原語で掲げますと次のとおりです。

THE FOUR-WAY TEST

Of the things we think, say or do

1. Is it the TRUTH?
2. Is it FAIR to all concerned?
3. Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIPS?
4. Will it be BENEFICIAL to all concerned?

Copyright, 1946, Rotary International

この成句の含んでいる意味をくだけた言葉で説明すればこうです。

- (1) うそ偽りのない事実のことだろうか？
- (2) 関係者みなに公明正大であろうか

？

(3) 善意と友情の現われになるだろうか？

(4) 関係者みなに有益だろうか？

何か物事を考える時に、口で言い表わす時に、また、行動に出る時には、必ず上記の四本の物差しで計ってみて、全部合っているかどうか吟味した上にしなさい、ということです。そのような習慣をつけたら、万事について最善最良の処置ができるのであります。成句の終りにコピーライト（版權）1946年と付いているのは由来があるのです。まずその話から始めましょう。

世界恐慌の嵐の中で

昭和7年（1932）のことです。そのころは世界中が不景気で深刻な恐慌風が吹

きすさんでございました。日本ではお米や生糸の値段が大暴落、銀行の取付け、会社の破産が相次ぎ、官吏の月給引下げまでありました。アメリカは不況の本元ですからなおさら大変です。多数の工場が閉鎖し、失業者が街にあふれてその数は何百万人、光明のない生活を送る時代でした。倒産寸前の会社のひとつにクラブ・アルミニウム (Club Aluminum Products) という台所用の鍋釜などを製造販売する中小企業がありました。

総資産よりもはるかに多い40万ドルの借財を抱えるこの会社の整理再建を債権者団から依頼されたのは、ハーバート・テラーという39歳のセールスマンでした。かれは当時ある製茶会社の有能な幹部社員で、近日社長に昇格の機会を待っていたのですが、決意してその会社を辞

職して破産会社の建て直しを引受けました。けれども再建資金は彼個人が銀行から融資をうけたわずか 6,100ドルにすぎず、並みだいていの努力だけでは復活は無理であった。テーラーは、同業競争者の持たぬ何物かを考案するのなければ再建の見込みが立たぬと痛感した。その時、かれの頭にひらめいたのは「正義は力なり」ということであった。よし、この信条を全従業員に徹底させよう。しかしこの信条は、ただの一語ではお題目となるだけで効果を望みがたい。また、長すぎても覚えるのが困難である。それで、全社員がすぐに暗記できるような、簡単な道徳の物差しをつくろう。同時にこれは、何をなすべきかを命ずるものではなくて、仕事の企画に、政策に、宣伝に、販売に、社員の行為に、すべての場

合に当って、それが正しいか否かを自ら悟ることのできるような質問の形がよいと思いついた。かなりの時間を費して作り上げたのが前掲のフォアウェイ・テストでありました。

如何に虚偽が多いか

テーラーは後日、述懐して次のように言うております。『私はこの“テスト”を自分の机の上のガラス板の下に入れて、会社の中のだれにも話さず、数日間自分だけで試めしてみることにした。ところが、その経験は全く失望に近いものであった。まず手始めに、自分へ持ち込まれた問題について“テスト”の物差しにあてはめてみた。第一の「事実なのか」を試みた時、私は“テスト”の紙切れをくずかごに放り込みたい気持ちにな

った。自分がいかにしばしば、真実とかけ離れているか、わが社のカタログ、書簡、広告文に如何に多くの虚偽が含まれているかを、それまで知らなかったのである。』

つづけてテラーはいう。『フォアウェイ・テストに則ってみずから生活しようと、たゆまず忠実に努力すること約60日ののち、私はその価値の偉大さを完全に理解した。同時に社長としての私の営みに屈辱を感じて、時には失望すら覚えたのであった。しかし私はこのフォアウェイ・テストに則って生活することに十分な進歩を遂げたので、そろそろ同僚にも話す資格ができたと感ずるようになった。そこで私は部下の四人の部長とこのことを論じ合ってみたのである。ついでながらこの四人はみな宗教が異なってい

た。一人はローマン・カソリック、一人はクリスチャン・サイエンスの信者、一人はユダヤ正統派、もう一人は長老派新教徒であった。』

『私はいずれの一人一人に、このフォアウエイ・テストは君たちの信仰や理想と背反する点があるかどうかを尋ねてみた。ところが四人とも、正直、公正、善意、有益ということは、単に彼らの宗教的理想に一致するのみでなく、もしこれをわが社の業務に絶えず利用するならば、大なる成功と進歩を生むであろうとの意見であった。四人の部長は、会社の企画、政策、宣伝、販売などの検討に、このフォアウエイ・テストを用いることに賛成した。そののち、従業員全部に対し、これを暗記して他人との折衝に当て利用することを求めた。』

広告文案を反省せよ

『フォアウエイ・テストで計って広告文案を検討した結果、事実の立証できないような文句は削除することになった。こうして私の会社の広告文からは best だとか finest だとかの最上級の文句が消え去ったのである。その結果、世間の人びとはわが社の広告内容を次第に信用するようになり、製品の売上高は漸次増加していったのである。』

『また、フォアウエイ・テストを常時利用する結果、競争業者との関係において、会社の方策も変らざるを得なくなり、会社のカタログその他文献からも、競争製品の悪口を一切削除するようになった。逆に、折りがあれば進んで商売仇をほめることにしたので、彼らからも信

用されてその友情を得ることができた。』

『会社の職員と幹部との関係にもフォアウエイ・テストを適用したため、お互いの友情と善意とを勝ちえたのである。同時に、私どもと同じ仕事をする人人の友情と信頼こそ、実業界における永久の成功に必要欠くべからざるものであることが判明したのである。』

破産会社が立ち直る

『従業員たちの20年間にわたる誠実な努力により、フォアウエイ・テストに表現されている理想に向って私どもは着実に進歩を遂げた。売り上げは増加し、従業員の所得も、会社の利益もふえたのである。1932年には破産状態にあった会社は負債を完済し、株主には100万ドル以上の配当金を支払い、会社の資産は200

万ドルを越えた。これらの報酬は、わずか6,100ドルの現金融資と、フォアウェイ・テスト利用のお蔭と、これに従った勤勉な善良な職員から得られたのである。』

『しかし、フォアウェイ・テストの利用から生ずる無形の配当の方が金銭的配当よりもはるかに大きいのです。わが社はお得意、同業者、ならびに一般大衆の善意と友情と信頼とを享有し、かつ、不断にこれが増大したのです。さらにもっと大切なことは、わが社の従業員自身が人間としての徳性を大いに改善できたことでありました。』

『単に職業上だけではありません。皆さんが、すべての人間関係において、このフォアウェイ・テストを日常生活に利用するならば、家庭でも、社会でも、正

しい考え方をする習性が身についてくるでしょう。そして諸君は、よりよき父となり、友となり、よりよき市民となることを信じて疑いません。』とハーバート・テラーは話を結んでいます。

ハーバート・テラーという人

テラー (Herbert J. Taylor) は1893年4月18日、アメリカミシガン州 Pickford の生れで本年満80歳です。シカゴ・ロータリークラブの現会員で、1939-40年度に同クラブ会長、1954-55年度には国際ロータリー会長をつとめました。大阪へもその翌年度(昭和31年)当時の第63地区大会へ、R.I.会長代理として臨席したことがあります。国際ロータリーでは1943年1月の理事会で、テラーの発案に成ったフォアウェイ・テス

トを、職業サービス部門で活用することを決定しました。この成句はアメリカにおいて1946年に著作権の登録がなされ、1953-54年度にこの著作権をテラーから国際ロータリーが無償で譲りうけたのであります。それ以来、“テスト”は多数の国語に翻訳されて、各国のロータリークラブの活動に偉大な貢献をなし遂げております。アメリカの大クラブを訪問すると、毎週の例会場には、ほとんど例外なく、フォアウェイ・テストの成句を染め抜いた、あるいは、金モールで成句を刺しゅうした大旗が目につきます。この旗のぼりは、フォアウェイ・テストを絶えずロータリアンの目に訴えて、自戒自省を促す役目を果たすのです。ロータリーがこの“テスト”を採用してから30年になりますが、世界各地でどのように

これが役立っているのか、具体的事例の数かずについて、大阪ロータリークラブが1972年2月発行した「フォアウェイ・テストは前進する」という40ページの冊子に報告されています。将来も一層このテストは広く活用されるであろうと信じます。

「尺度」の誤用のないように

ここで一言したいのは、フォアウェイ・テストが誤用されることのないようにという点です。テストなる言葉は、もともと試験、検査、吟味などの意味でありまして、日本では大戦後に流行し始めたものです。学校とか会社とかのテストでは、4問中の3問が正解ならば75点という式の採点が普通です。しかし、フォアウェイ・テストはそうでない。四項目

完全合格でなければパスしないのです。
物ごとの処理に当面して、3項目が合格しても、残る1項目が引っ掛かる場合は駄目なので、その処理は保留として再考しなければならない、という性質の尺度なのです。

論語の三省、ロータリーの四省

過去幾百年にわたってわが国の道徳の基礎をなした「論語」には「三省」というのがあります。2,500年昔の孔子様の弟子の曾子のことば「われ日にわが身を三省す。人のために謀りて忠ならざるか。朋友と交わりて信ならざるか。習わざるを傳えしか」であります。フォアウェイ・テストはキリスト教義に則ってハーバート・テラーが考案した成句ですが、論語の「三省」に対してこれはロー

タリーの「四省」とでもいうべきでしょう。“Four-Way”は複数でなく単数で書いてあり、かつ、ハイフンで連結された一語となっています。オックスフォード辞典によれば、「four-way とは二路の交差する所、または四路の出合う所」と説明されています。つまり、四つ辻であって、四本の道路ではないのです。このテストは、四つ辻に来た時、一旦歩みを停めて、右へ行くべきか、左すべきかと、正しい進路を求めて思いめぐらす意味だと解釈してもよろしいのです。“テスト”の作者ハーバート・テラー自身もこのような解釈に対して、「りっぱな解釈です」と1972年4月6日付の親書で私あてに返信してくれました。

日本語訳の検討を

“テスト”の第二句にある“FAIR”を従来「公平」と訳されていますが、FAIRの意味は、単に一方に偏しない、あるいは、甲と乙と双方のバランスを考える意味の「公平」と解釈することは狭きに過ぎます。これでは正、邪、または、適・不適の判断にフェアな解決はできません。フェアは fair play、fair trade などの如く「正しい」という要素を含んだことばです。日本語では公明正大とか公正とか表わすべきでありましょう。

次に、第二句と第四句には、ともに“all concerned”という辞句があります。簡単に“all”といわず“concerned”の語を加えてあるのは大切な点でありま

す。“テスト”の作者は“concerned”つまり「係わりのある人」に範囲を限して、判断をつけやすくし、利用の容易な尺度にしたのだと思います。「みんな」つまりすべての人間を対象に判断するのは困難なことで、それでは、フォアウェイ・テストはスローガン化して、具体的な事柄の処理には役立たぬと考えたのでありましょう。

最後に、このフォアウェイ・テストの終局の狙いは、りっぱな人間づくりにあります。そのためには、まず心の中で考えることが常にりっぱでなければなりません。心は邪悪でも、言葉や行動だけはりっぱに見せかけることも有り得るのです。テラーは、それゆえ、言行よりも先に心の中の考え方を正しくあらしめるために“think,say or do”と書いている

のです。この第一番に大事な “think” を日本語訳で省略されていることは問題であります。

大阪ロータリークラブの例会場では毎週、英語の THE FOUR-WAY TEST の大旗を掲げています。従来からの日本語訳文を次ぎに書いておきますから、上述の解説とくらべてお読み下さい。

四つのテスト

言行はこれに照してから

1. 真実かどうか。
2. みんなに公平か。
3. 好意と友情を深めるか。
4. みんなのためになるかどうか。

〔版權、1946年、国際ロータリー〕

(おわり)